

# 連盟だより

公益社団法人 日本精神保健福祉連盟

Japan Federation for Mental Health and Welfare



2014-2. 20

通刊 49号



## 公益社団法人日本精神保健福祉連盟 会長就任にあたって

公益社団法人日本精神保健福祉連盟 会長 仙波 恒雄

このたび、日本精神保健福祉連盟の理事長を退任し、平成25年6月25日をもちまして会長に就任いたしました。

そして、新たに鹿島晴雄 国際医療福祉大学教授（前慶応義塾大学医学部教授）が理事長に就任され、保崎秀夫前会長は名誉会長に推せられました。

これからは加盟10団体の皆様のご支援とご協力により、鹿島理事長をはじめ役員の方々、事務当局の助けを得て努力するつもりですのでよろしくお願い申し上げます。

さて、精神保健福祉を巡る動きでは、平成25年6月に精神保健福祉法の改正が行われました。

今回の改正では、①精神障害者の医療の提供を確保するための指針の策定 ②保護者制度の廃止 ③医療保護入院の見直し ④精神医療審査会に関する見直しが平成26年4月1日から行われることとなります。

保護者制度は廃止し、医療保護入院における保護者の同意要件は外すものの、家族等のうちのいずれかの者の同意を要件としました。さらに精神障害者の医療の提供を確保するための指針の策定は、医療保護入院者の退院後の生活環境に関する相談及び指導を行う者の設置、地域援助事業者との連携、退院促進のための体制整備が精神科病院の管理者に義務付けられました。保護者制度廃止など今回の大きな改正の施行にあたり、現場に混乱が生じないよう必要な医療が迅速に提供できるよう実効的な検討を急がなければならないと思います。

さて、本連盟の主要な行事である第61回精神保健福祉全国大会は平成25年10月25日、青森県青森市において500名の参加者を得て盛大に行われました。

今大会は、「子どものこころの未来を考える」をテーマに「子どものこころ」をとりまく現状や課題について検討することにより、全国の精神保健福祉関係者ならびに一般の方々とともに、精神保健福祉に関する正しい知識の普及と新たな精神保健福祉施策の推進を目指して開催されました。記念式典では、厚生労働大臣、青森県知事などの挨拶があり、精神保健福祉事業功労者に対して厚生労働大臣表彰状、本連盟会長表彰状が授与されました。

また、浜松医科大学 森則夫教授による「子ども

のこころは何かわかってきたか」をテーマにして記念講演があり、さらに「子どものこころの未来を考える」をテーマにしてシンポジウムも開かれ、本大会は成功裡に終えることができました。

また、その他の行事では、本連盟は精神障がい者スポーツ国際化実行委員会ならびに公益財団法人日本障害者スポーツ協会とともに第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウム・会議を世界初の試みとして日本で平成25年10月5日と7日にそれぞれ開催されました。現在、精神障がい者・精神疾患が参加できる国際大会は開催されておらず、精神障がい者・精神疾患のスポーツの国際統括競技団体は存在していない状況にあります。今回関係諸国の代表の方々にお集まりいただき、各国の共通の課題などについて、お互いに情報交換を行い共に議論することは、わが国のみならず、関係諸国の精神障がい者スポーツ国際交流の促進に大きく寄与すると考えています。

10月5日のシンポジウムでは参加者約260名が集まり、内容は関係参加8カ国（イタリア、イングランド、デンマーク、ドイツ、アルゼンチン、ペルー、韓国、日本）の実践者による活動報告と「精神障害者スポーツ領域における国際間の交流を促進させるために、国際組織の構築と国際大会開催の実現を早急に目指していくことを宣言する」とした『東京宣言』が採択されました。

10月7日の国際会議では、関係参加8カ国の代表者及びオブザーバーとしての日本の関係者が集まり、①精神障害者スポーツの国際的な発展を目指し、国際ネットワークの構築をはかること、②2013年の国際シンポジウム及び会議に参加した8カ国すべてにおいてサッカー（フットサル）が推進されていることから、まずはサッカー（フットサル）から精神障害者スポーツの推進をはかること、③2015年、日本（大阪が予定地）で国際サッカー大会の開催を目指すことが合意されました。

最後に、本連盟は正会員と賛助会員の団体および個人の援助により成り立っており、今後とも変わらぬご援助を賜りたく、各団体のますますのご発展をお祈り申し上げます。

# 第1回精神障がい者国際シンポジウムを開催して

公益社団法人日本精神保健福祉連盟 常務理事  
「精神障がい者スポーツ国際化実行委員会」委員長

大西 守

去る2013年10月5日に東京・明治学院大学において、第1回精神障がい者国際シンポジウムが開催され、海外7カ国からの招待者を含め260名以上の参加があり、成功裏に終了することができました。これは、精神障がい者スポーツ国際化実行委員会、(公社)日本精神保健福祉連盟、(公財)日本障害者スポーツ協会の主催で、その他多くの関係者の協力を得て実現したものです。



日本では、2008年に大分県で開催された第8回全国障害者スポーツ大会から精神障害者バレーボールが正式競技となり、三障害による全国障害者スポーツ大会が実現できたことで、つぎに精神障害者スポーツ関係者の大きな目標の1つとなったのが精神障害者スポーツの国際化です。その先駆けとして、2011年3月に日本の精神障害者フットサルチームがイタリア遠征し、地元チームと親善試合を行ないました。

そして、精神障害者スポーツに関する国際間での情報交換とネットワークの確立を目的として、今回の第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウムの開催となりましたが、世界初の試みといえます。海外からイタリア、イングランド、デンマーク、ドイツ、アルゼンチン、ペルー、韓国と7カ国からの関

係者の参加がありました。日本語、英語、スペイン語、韓国語が入り混じる国際的な環境下、参加者の真剣かつ真摯な姿が目につきました。当然のことながら、各国関係者の障害やスポーツに対する歴史的背景や考え方は多様でした。このシンポジウムを契機に、母国での精神障害者スポーツ発展の起爆剤になるという意見が聞かれたことは大きな収穫の1つです。シンポジウムの最後に、「精神障がい者スポーツ東京宣言2013」が採択され、精神障害者スポーツ領域における国際間の交流促進と国際組織の構築が確認され無事閉幕しました。



シンポジウムの結果を受けて、10月7日に日本精神科病院協会会議室において、クローズの形で第1回精神障がい者スポーツ国際会議が開催されました。

その結果、各国で最も盛んなサッカー・フットサルをモデル競技として国際大会開催を目指すこと、対象疾患としてはF2、F3を主要疾患と想定するものの、他の競技や他精神疾患も排除するものではないことが確認されました。最後に、岡村武彦副委員長から2015年に大阪でサッカーを中心とした国際交流スポーツ大会開催の用意があることが表明され、大きな拍手がまき起こりました。

# 第61回精神保健福祉全国大会が開催される

公益社団法人日本精神保健福祉連盟 事務局長 中山 拓 治

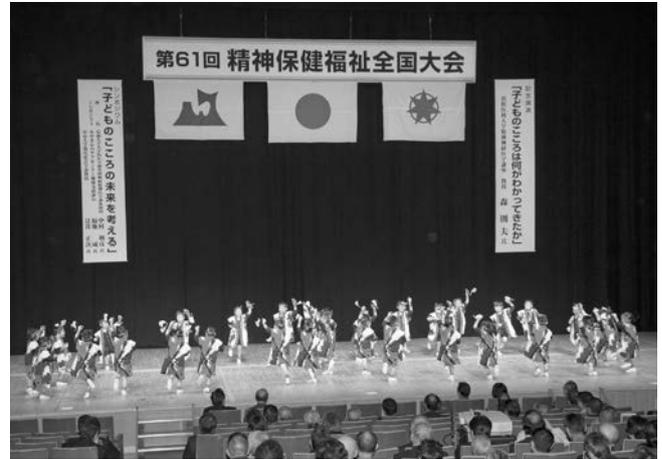
平成25年10月25日に青森県青森市民ホールで、第61回の精神保健福祉全国大会が厚生労働省および公益社団法人日本精神保健福祉連盟が主催し、青森県、青森市、青森県精神保健福祉協会、青森県精神科病院・診療所協会、日本精神科病院青森県支部が共催、最高裁判所、内閣府ほか多数の中央省庁、各種障害者団体、医療関係団体の後援を受けて開催されました。

本大会の趣旨は、子どもをとりまく環境は大きく変化しており、特に子どものこころの問題は、いじめ、体罰、虐待などが昨今大きく取り上げられています。東北の震災地区では子どものこころのケアがさらに重要で様々な支援が行われていますが、まだ十分なのではありません。

今回の大会では、「子どものこころの未来を考える」をテーマに「子どものこころ」をとりまく現状や課題について検討することにより、全国の精神保健福祉関係者ならびに一般の方々と共に、精神保健福祉に関する正しい知識の普及と新たな精神保健福祉施策の推進を目指し、開催されたものです。

午前10時から始まった記念式典では、前年開催地の宮崎県から「心をひらく鍵」の引き渡しが行われた後、中村和彦大会実行委員会会長の開会の言葉に引き続き、仙波恒雄公益社団法人日本精神保健福祉連盟会長の式辞、厚生労働大臣、青森県知事、青森市長の挨拶がありました。その後、精神保健福祉事業功労者の表彰に移り、個人54名および16団体に厚生労働大臣表彰状が授与され、続いて公益社団法人日本精神保健福祉連盟会長表彰、青森県知事表彰、青森県精神保健福祉協会会長表彰が行われました。

受賞された皆様には日頃からの活動に敬意を表す



ると共に、心からお慶びを申し上げます。

記念式典は、最後に次回開催県の徳島県小谷敏弘保健福祉部長から歓迎の挨拶で滞りなく終わりました。

記念式典終了後には、アトラクションとして青森市中心部の歴史ある「和幸保育園」の園児による舞踊や「日本郷土芸能研究保存会」による津軽三味線演奏などをご披露いただき、会場を大変盛り上げてくれました。

アトラクションにご出演していただいた皆様には、感動をいただき、また、熱演をどうもありがとうございました。

午後からは、記念講演として浜松医科大学精神医学講座 森則夫教授による「子どものこころは何がわかってきたか」というテーマで講演がありました。

森先生は、子どものことに関していろいろな政策立案をする研究者が少ない状況の中で、2006年に「子どもの心の発達研究センター」を立ち上げて、子どもの支援を行う研究者や子どものことに関しての政策立案を行う研究者の人材育成に力を注いで大変ご活躍されています。今回は、森先生が長年子どものことに関して研究してこられた内容でご講演をいただきました。

本大会は、田崎博一大会実行委員会副会長の閉会の言葉で盛会のうちに閉幕しました。

今大会を成功裡に終えることができましたのは、大会実行委員会の中村会長はじめ実行委員会の委員の方々、そして青森県、青森市ならびに関係団体の皆様のおかげであり、ご協力に心より厚く御礼申し上げます。

# 第13回全国障害者スポーツ大会 精神障害者バレーボール、精神障害者フットサル

公益社団法人日本精神保健福祉連盟 常務理事  
「精神障害者スポーツ推進委員会」委員長

大西 守

第13回全国障害者スポーツ大会が平成25年10月12日（土）から14日（月）の3日間にわたり東京都で開催されました。精神障害者部門に関しては、正式競技である精神障害者バレーボールは同じ期間に東京都渋谷区の国立代々木競技場において開催されました。天候にも恵まれ、多数の観衆を集めていました。国立代々木競技場にはメインコートが3面あり、知的障害と聴覚障害のバレーボールがそれぞれ並行した形で実施されていたので、三障害合同での全国大会であることを強く実感させるものでした。

青森県（北海道東北）、横浜市（関東）、浜松市（北信越東海）、大阪府（近畿）、岡山県（中国四国）、福岡市（九州）、東京都（開催県）の7チームで熱戦が繰り広げられ、優勝は横浜市、準優勝は東京都でした。隣接したコートで行われていた知的障害、聴覚障害のバレーボールを眺めてみると、男女別のため皮製バレーボールが使用されており、ソフトバレーボールを使用し男女混合の精神障害者バレーボールとは違った緊張感や迫力が感じられ、皮製ボールを使用した精神障害者バレーボールについても検討する必要があると考えられました。

一方、第13回全国障害者スポーツ大会のオープン競技として実施された精神障害者フットサルは、平成25年10月6日（日）に、東京都港区の明治学院大学白金キャンパスパレットゾーン白金において開催されました。参加チームはNorthern United（北海



道・青森県・宮城県）、埼玉CAMPIONE（埼玉県）、アトムズ甲府（山梨県）、YARINASSE大阪（大阪府）、愛媛オレンジスピリッツ（愛媛県）、amigo長崎（長崎県）、BOSCO NEXT（東京都A）、Fraccida東京（東京都B）の8チームで熱戦が繰り広げられ、優勝はNorthern United、準優勝はYARINASSE大阪でした。

大会前日の10月5日（土）に同じ明治学院大学において第1回精神障がい者スポーツ国際シンポジウムが海外7カ国からの関係者を集めて開催されたことから、7カ国関係者にも大会を観戦してもらい、日本での精神障害者スポーツの活況を肌で感じてもらうことができました。精神障害者フットサル・サッカーの国際化についても喫緊の課題で、関係者の奮起を期待したいところです。



写真提供：スポーツ祭東京2013実行委員会



動き

movement

## 群馬県こころの健康センターの動き

群馬県こころの健康センター 所長

浅見 隆康

群馬県こころの健康センターは、群馬県の中央に位置し、精神保健福祉センター業務と精神科救急情報センター業務を5係で嘱託職員を含め総勢43人で事業を推進しています。

救急情報センター業務は全職員体制で県内の措置移送業務を行い、通報は年間340件(平成24年度実績)にも上ります。特色として、通報で入院となった事例の退院前支援会議に参加したり、退院後、自宅訪問や所外相談などアウトリーチ活動を実施しています。昨年度から精神科医指定医連絡会議を9年ぶりに開催し、精神科医の先生方に群馬県内の現状を伝え、協力を求め、一次二次救急の整備に向けて動き出しているところです。

精神保健福祉センターの業務としては、相談援助係を中心に、家族支援・教育に力を入れており、特に最近ではひきこもり家族教室にSSTを導入し、また依存症家族教室では、今年度から依存症者を抱えるご家族が、より適切な対応を学ぶことができることを目的に、プログラム(G.I.F.T)を作成し運用

を始めています。ほかに高次脳機能障害の家族教室、若年認知症家族教室もありますが、これらの教室から家族会が結成され独自にも活動しています。

自殺予防対策事業ではゲートキーパー養成、自殺未遂者対策に重点を置いて取り組んでいます。ゲートキーパー養成では、群馬県版のゲートキーパー手帳を作成し、研修用資料を作成し、地域機関に提供するなど普及啓発に取り組んできました。自殺未遂者対策としては、「自殺未遂者こころの支援事業」を県内の救命救急センターなどとの連携により実施しており、支援会議や訪問などを通じて、再企図の防止に取り組んでいます。

今後の動きでは、積極的なひきこもり対策の実施に向け準備を進めており、26年にはひきこもり支援センターが設置される予定になっています。

精神保健医療福祉を取り巻く状況は大きな変化が予想されますが、私たちは常に地域に目を向け、地域に根付いた精神保健行政を推進していく所存です。今後ともご支援のほどお願いいたします。



動き

movement

## 「おちゃのこスーミン、頑張ってまスーミン！」

鳥取県立精神保健福祉センター 所長

原 田 豊

スーミンは、平成23年に誕生した鳥取県「眠れますか？」睡眠キャンペーンのマスコットキャラクターです。当センターをはじめ県内の保健所、市町村の健康相談窓口には、スーミンのかわいいぬいぐるみが飾られています。

「鳥取県は右、鳥根県は左」。鳥取県は山陰の東側に位置する人口60万人の日本で一番人口の少ない県です。小さい県だからこそまとまりよく、スピーディーにできることが多くあります。

ひきこもり対策は、平成14年から県独自の社会参加支援事業を開始しました。現在は、とっとりひきこもり生活支援センターが中心となり、当センターや保健所と連携をとりながらひきこもり者の支援を行っています。頑張ってまスーミン！

自死対策は、平成17年、2町においてモデル事業を実施し、その後、各市町村において住民対象の健康教育や研修、独自の特色ある活動も広がってきました。当センターも、睡眠健康教育、うつ病の早期

発見・介入、ゲートキーパー研修、自死遺族支援などに力をいれています。頑張ってまスーミン！

精神障害者退院促進、地域生活支援活動も、平成15年のモデル事業に始まり、その後、県独自の事業として、県内全ての精神科医療機関が参加し、保健所、市町村と連携をとりながら積極的に展開しています。頑張ってまスーミン！

そして、当センターは、平成3年の開設以来、医師、保健師、精神保健福祉士、福祉職、心理職などの専門職を中心としたメンバー9人で、教育研修、普及啓発などを行うとともに、特に、精神保健福祉相談を大切に行っています。近年は特にひきこもり、成人の発達障害に関する相談が増えていますが、さまざまな機関と連携をとりながら対応しています。スタッフ全員、「おちゃのこスーミン、頑張ってまスーミン！」です。

(※おちゃのこスーミン：スーミンに任せておけば、おちゃのこさいさいの意味らしい)

# 公益社団法人日本精神保健福祉連盟役員並びに名誉会長一覧

平成26年1月現在

1. 理事 (15名)	
【代表理事 2名】	
会長	公益社団法人日本精神科病院協会 仙波恒雄 (非常勤)
理事長	国際医療福祉大学 鹿島晴雄 ( )
【常務理事 3名】	
常務理事	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会 吉川武彦 ( )
	日本精神衛生学会 大西守 ( )
	公益社団法人日本精神科病院協会 富松愈 ( )
【理事 10名】	
理事	公益財団法人日本精神衛生会 牛島定信 ( )
	公益財団法人復光会 佐藤譲二 ( )
	公益財団法人矯正協会 水上要 ( )
	公益社団法人全日本断酒連盟 中田克宣 ( )
	(社)日本精神科看護技術協会 早川幸男 ( )
	公益社団法人アルコール健康医学協会 玉木武 ( )
	公益社団法人日本精神神経科診療所協会 渡辺洋一郎 ( )
	公益社団法人日本精神保健福祉士協会 竹中秀彦 ( )
	公益社団法人日本精神科病院協会 大野史郎 ( )
	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会 高畑隆 ( )
2. 監事 (2名)	
	公益社団法人日本精神科病院協会 松村英幸 ( )
	一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会 丸山晋 ( )
3. 名誉会長 (2名)	
	公益社団法人日本精神科病院協会 栗田正文
	慶應義塾大学名誉教授 保崎秀夫

【役員任期 平成25年6月25日より  
平成27年の定時社員総会終了まで】

注1 公益社団法人日本精神保健福祉連盟定款  
第27条 (役員任期) によるものとする。



## 〈編集後記〉

連盟だよりNo.49をお届けします。

今回は昨年6月に当連盟の会長に就任しました、仙波恒夫先生から決意表明を掲載させていただきました。ご指摘のとおり多くの課題があり、これからの当連盟の発展について多くのご意見をお待ちします。

また、第1回精神障がい者国際シンポジウム・会議は成功裏に終わり、精神障害者スポーツの国際化へ大きな弾みとなりました。オールジャパンの体制で臨みましたが、当連盟の礎でもある多職種協働の結果でもあります。

今年度も、精神保健福祉全国大会の開催、全国障害者スポーツ大会への精神障害者バレーボール競技の参加など、多くの事業が予定通り実施できました。来年度もより多くの事業が計画されておりますので、引き続き、関係団体の方々のご理解・ご協力をお願いする次第です。

(M. O.)

## 編集委員会

委員長 大西 守 公益社団法人日本精神保健福祉連盟常務理事  
委員 仲野 栄 (社)日本精神科看護技術協会専務理事  
高畑 隆 一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会理事  
塩入 祐世 公益社団法人日本精神神経科診療所協会会員  
東京精神神経科診療所協会副会長

寺田 一郎 (社福)ワーナーホーム理事長

発行 平成26年2月

発行者 公益社団法人 日本精神保健福祉連盟

会長 仙波 恒雄

〒108-0023 東京都港区芝浦3-15-14

TEL 03-5232-3308 FAX 03-5232-3309

Email : f-renmei@nisseikyo.or.jp

HP : http://www.f-renmei.or.jp

印刷 社会福祉法人 新樹会 創造印刷